



39 東瀛傳苑図

鉄斎 — 青緑山水の時代 —

2017年9月12日[火]—11月26日[日]

前期:9月12日[火]～10月15日[日] 後期:10月21日[土]～11月26日[日]

学芸員による展示説明会=9月23日、10月7日、28日、11月11日 各土曜日 午後1時30分より
開館時間=午前10時～午後4時30分(入館は午後4時まで)

休館日=月曜日 ただし9月18日、10月9日は開館、翌日休館



26 青緑山水図(右隻)

青緑山水とは、緑青や群青などで彩色された山水画のことである。富岡鉄斎(1836～1924)は水墨山水を得意としたことで知られているが、青緑山水にも優れ、精彩に富んだ数々の傑作を遺している。

東アジアにおいて古来より人々は、隠逸思想や神仙思想にみられる理想郷を追い求め、山水風景のなかに心遊ばせた。近代日本に至り、思想的憧憬を受け継いだのが鉄斎であった。中国の画論、画法に学んで「古法の重色彩画、容易の技術に非ず」(「画論」、1905年)と見識を深め、伝統的な青緑山水の継承者として清新な画面を創出することを試みている。こうした意識を持った近代文人は鉄斎が唯一であり、最後の文人画家と称される所以であろう。

典拠と実証 京都に生まれ、江戸時代の儒学、漢学を学んだ鉄斎が本格的に中国文化に触れたのは、文久元年(1861)の長崎への遊学の時であった。数ヶ月の滞在期間中に鉄翁祖門、木下逸雲ら文人と面会し、明清画を見る機会にも恵まれた。千年の都にあっても、若き鉄斎が目にした中国書画は、今日では真偽の定かでない亜流のものが多かったことが想像される。江戸時代に伝来した「中渡り」、ましてや室町時代に伝来した「古渡り」の名品を見ることができるとは限られていた。

28歳の詩文集「郢正」(1863年)に所収される「題自画」詩には、「余、毫を把る毎に、^{つおう}輒ち董思翁(其昌)の筆意に倣わんと欲す」とあり、また慶応4年(1868)、33歳の筆になる「擬明人筆着色山水図」(No.1)には、いわゆる米法山水という山水画の技法が用いられ、明の雷半窗(鯉)の筆に倣ったと箱書に識されている。後世の書画家に多大な影響を与えた明末の文人董其昌、あるいは今日ではほとんど作例が知られていない雷鯉のいかなる作品を鉄斎が目にしていたかはわからないが、真摯に学び、倣古を試みていたことが知られる。

明治2年(1869)、書肆佐々木竹苞楼のために描かれた《層巒積翠図・溪山不盡図》は、各幅の特異な山容が清代の新傾向の画に学んだことを示している。

賛には「古法を墨守するだけではいけないし、かといって自己流だけでもいけない。古法を内に含めながら自分を出すのがよいのだ」、「文章は氣を以て主となすと古人が言っているが、画も同じで、そうでなければ天真瀟灑な趣きをうることはできない」とある。前者は『国朝画徵録』(No.73)所収の清初の文人画家王原祁(麓台)の伝記のなかにある一節、後者は魏の文帝(曹丕)の文学書『典論』から引用したもので、古人の言葉を借りながら己の考えを表す手法がとられている。

この頃鉄斎が学んでいた中国書画は、江戸時代の文人画家と大差がなかったと考えられる。一方、新たにもたらされる大陸の僅かな息吹に憧憬を抱きながら、先人たちと同じく原典批評を模索していた。周辺では、鉄斎が南画を学んだとされる小田海僊が董其昌の『画禅室随筆』(銭屋惣四郎、1840年)を翻刻刊行し、兄事する山中信天翁が『清名家論画集』(五車楼菱屋孫兵衛、1861年)に序文を寄せている。鉄斎自身も、明代の周高起の『陽羨茗壺系』を抄訳した茶書『鏡莊茶譜』(竹苞書楼、1867年)を刊行した。儒家の基礎經典である四書五経はもとより、こうした中国の芸術論を精力的に読み進めることで、万物の真理を捉える力を養い、実証的な表現としての書画を創出していったのだろう。

鉄斎の画論 鉄斎は幕末には私塾で儒学を講じ、維新後は神職をもって明治14年(1881)まで経歴を積んだ。かたわら書画の制作を行って生活の資としていたが、その名が美術史上に現れるのは、明治19年、51歳の時である。この頃幸野樗嶺主催の京都青年絵画研究会が結成され、展覧会の開催に伴い鉄斎は儒者の谷鉄臣とともに学士審査員を務めた。明治27年からは10年間にわたって京都市美術学校(京都市美術工芸学校に改称)の嘱託教授として教壇に立った。鉄斎が担当したのは修身と考証学で、「時々歴史人物や甲冑衣冠、その他総ての考証などに就て生徒



1 擬明人筆着色山水図

に教授しているが、どうも生徒の学力が其処に至らんから、此方のいうことが腹に入りかねる。元来画家というものは、昔から不学無術の者が多いからどうも困る」(黒田天外『名家歴訪録上篇』山田芸艸堂、1899年)と苦言を呈しつつも、「画を以て法を説く」、「画は勸戒に資す」ことを信念とした鉄斎にとって、人を導き教育することは喜びであったと推察される。明治30年には田能村直入ら京都の南画家20数名と日本南画協会を設立、この頃より後素如雲社にも参加して展覧会に出品していた。

とはいえ鉄斎は専ら学者として画壇に接し、美術界の方でも鉄斎を学者として尊敬していた。明治23年に「清帝我邦ノ美術品ヲ賞ス」(『京都美術雑誌』第1号、1890年)を著したのを皮切りに、「陶工木米画像并逸事」(『京都美術協会雑誌』第6号、1892年)、「僧牧溪の事」(『南宗画志』第4号、1902年)などの美術に関する短い文章を、明治38年まで発表している。鉄斎は生涯漢文を用いたが、美術雑誌に寄稿された文章はいずれも普通文で書かれており、画壇や教育現場との接点もたらした変化の一つと考えられる。

ところで、これらは鉄斎の芸術観を窺うべき重要な資料であるが、なかでも「画論」(『画林』第10号、1905年)は、生存中に発表された唯一の画論として注目される。画の六法のうちの応物象形、随類賦彩の意義を述べ、水墨画が発展し、古来の画法である彩色画が衰退した経緯とその重要性を論じるものである。今日、この原稿は《鉄老談芸卷》(No.21)と題される一巻に仕立てられ、同じ制作時期と思われる鉄斎の山水図、黒田天外宛書簡、さらに後年の長尾雨山の題字、内藤湖南の跋を伴う。跋文のなかで湖南は、浦上春琴、賞名海屋が「設色をもって古法となす」ことをいい、「鉄斎翁は、画に於て雅より神解有り。其の作る所は、水墨多しと雖ども、固より、古法の此に存せずして、土佐氏画院の体は、乃ち隋唐薪伝(伝統を継承すること)の遺なることを知る。此の卷、画を論じて、其の真意を發す。所謂、吾、爾に隠すこと無き者なり。翁の画跡を読む者、併せて斯の論を読めば、其の妙諦を得るに庶し(原漢文)」と述べるのは鉄斎の意を捉えているといえよう。

古画からの学び さて、中国本場の文人たちが珍重した名画が日本に伝わり、江戸時代の文人画家たちが称揚し、あるいは模写した臨模本は、中国画学習を渴望していた鉄斎にとっては格好の対象であった。とりわけ南宗画の基礎を作った元末四大家の一人である黄公望(大癡)は、日本においても尊崇を集めてきた。かつて多武峰の談山神社が蔵していた《天池石壁図》は、黄公望作として夙に有名で、彭城百川、野呂介石、高芙蓉、円山応挙らが激賞し、鉄斎も鑑賞する機会があったという。明治時代に大阪の実業家藤田傳三郎の所蔵に帰してのち、鉄斎はその来歴を問われ、添帖の跋を識しているが、筆録「愛日惜時記」(1915年)には「余、未だ敢えて真と為さず」としており、真筆とはみなしていなかったようである。しかしながら《天池石壁図》の臨模本(No.75)を生涯手もとに置いて、山や岩壁の複雑な積み重なりが特徴的な画風に学んでいたことは明らかである。

明治32年(1899)、鉄斎は中国画学習に情熱を注いだ小田海僊の写生帖及び粉本類数百点を購入する。このことは、鉄斎の中国画理解に拍車をかけることになった。《摸孫無逸山水画卷》(No.18)は、黄公望風の画法を得意とした清代の画人孫逸(無逸)の作品を通して、黄公望の画法を追い求めた田能村竹田が蔵していた山水画卷を友人の海僊が模写し、それを鉄斎が再摸したものである。さらに海僊の遺墨のなかの「金陵勝覽図。正徳庚辰七月既望、写於夢墨亭中、呉郡唐寅。」との題賛がある粉本は、77歳の大作《青緑山水図》(No.26)右隻のテキストになっている。海僊を通して明代の文人唐寅の画風を研究し、画卷から屏風という大画面へ構成を変容させ、文人の理想郷を気宇壮大な青緑山水で創出したところに鉄斎の卓越した画力を見ることができる。

なお鉄斎は、20世紀以降に伝来した「新渡り」と呼ばれる中国書画にも学んでいる。明治30年、32年と2度にわたって渡清した篆刻家の桑名鉄城は、内藤湖南、長尾雨山らに先駆けて多くの明清画の名品を日本にもたらした。親交の深かった鉄斎は、鉄城の所蔵品図録『九華印室鑑蔵画録』(1920年、私家版)に題字を寄せ、親しく目にした作品から《伏魔大帝関雲長像》などを描いている。また大正3年には、清末のコレクター廉泉が蔵していた清初の遺民画家石濤の《東坡時序詩意図冊》(大阪市立美術館蔵)を借覧して、《摸石濤山水画冊》(No.29)を模写制作した。

「書物という書物、画論という画論は大概貫って読んで居る。先年、死んだ伴の謙蔵(元京都大学講師)を支那に遣ったのも、画論を集めさしにやったような訳」(『山水画談』、1919年)と晩年鉄斎は語っている。若く生活が苦しかった時代は高価な舶来の画譜や芸術論を購うことは叶わず、比較的入手しやすい和刻本で学んでいた。

大成してからは中国山水版画の傑作『太平山水図』、あるいは『歴代名公画譜』(No.68)、『十竹齋書画譜』(No.69)、『芥子園画伝初集』(No.70)などの稀観本はじめ、あらゆる分野の書籍を渉獵した。本展覧出品の旧蔵本のうち『黄山図』(No.71)、《龍門勝境図》(No.72)は中国に買付けに出かける書肆鹿田松雲堂、文求堂に依頼し、彼らが携え帰ったものである。以上のように、鉄斎は激動する時代と新たな価値観に応じて、「古渡り」から「新渡り」までの中国書画に学んでおり、生涯において多くのテキストを手にする事ができた稀有な表現者であった。

青緑山水の時代 60歳代から70歳代にかけて、鉄斎は積極的に青緑山水の大作に挑んでいる。富士山頂の峨々たる岩塊に鮮やかな緑青と群青を施した《富士山図》(No.13)、趣向の異なる山容に画譜からの学びの跡が窺える《山水図貼交屏風》(No.15)、そのほか青緑山水の傑作として知られるのは、賀陽宮家に献上した《瀛洲倦境図・武陵桃源図》(京都国立博物館蔵)、日本の名勝を青緑山水で表した《富士遠望図・寒霞溪図》(京都国立近代美術館蔵)、《妙義山図・瀟八丁図》(布施美術館蔵)、さらには大正3年(1914)、79歳の筆になる《阿倍仲麻呂明州望月図・円通大師呉門隱栖図》(重要文化財、辰馬考古資料館蔵)などがある。これらは親交を結んだ人のために描かれた作品であった。

文人が書画を描くのは自らを清娛して、性情を淘汰する遊戯であるとの考えから、鉄斎は先述のように美術団体では日本南画協会と後素如雲社にのみ参加して、諸種の展覧会、共進会、博覧会の審査員は務めても、自らの作品を公募展に出品することはなかった。明治37年(1904)、京都市美術工芸学校嘱託教授の職を解かれると、翌38年1月の後素如雲社新年初会展に絹本淡彩の《福祿寿図》を出品したのを最後に、画壇との関係に終止符を打った。

ところが明治42年、展覧会活動とは一線を画していた鉄斎に新たな転機が訪れる。高島屋に美術部が創設されるのに先駆けて、初の展覧会「現代名画百幅会」が京都店と大阪店において開催され、鉄斎は《秋景山水図》を出品した。横山大観、竹内栖鳳、川合玉堂、菱田春草ら東西画壇の名家の作品が一堂に会するなか、74歳にして一躍全国区に名乗りをあげたのである。この頃の鉄斎は、青緑山水の様式を意図的に選択し、出品していたようである。こうした取り組みは、鉄斎が青緑山水を復古的な画題として捉えていたのではなく、中国盛唐以来の伝統的な絵画の精神を継ぐ者として、自らを強く意識していたからにはほかならない。晩年にして得た自由な発表の場を大いに楽しみ、年に数回開催される展覧会に、大正13年に数え89歳で没するまで出品し続けた。《王元之竹樓記図》(No.34)、《寄情丘壑図》(No.36)、《東瀛三神山図》(No.38)、《東瀛僊苑図》(No.39)、《茂松清泉図》(No.41)、《空山静境図》(No.45)は、いずれも高島屋美術部展覧会に出品された青緑山水の名品である。



38 東瀛三神山図

本展覧では、鉄斎にとって「青緑山水の時代」というべき70歳前後から80歳代半ばの作品を中心に、壮年期の清雅な隠棲図から最晩年の豊潤な仙境図までをご覧いただく。併せて中国画学習の形跡が認められる鉄斎の粉本、旧蔵本などの資料も紹介する。

(柏木知子)

【主要参考文献】

『高島屋美術部五十年史』(高島屋美術部五十年史編集委員会、1960年)、『富岡鉄斎 図録編』(京都新聞社、1991年)。関西中国書画コレクション研究会『中国書画探訪 関西の収蔵家とその名品』(二玄社、2011年)。柏木知子『鉄斎と高島屋美術部展覧会』(『富岡鉄斎 - 近代への架け橋 -』、兵庫県立美術館・鉄斎美術館、2016年)。

《出品目錄》

[富岡鉄斎筆]

番号	名 称	制作年		年 齡	寸 法	材質・技法	員 数
1	擬明人筆着色山水図	慶応4	1868	33	129.3×42.5	絹本着色	1幅
2	青緑山水図	明治2	1869	34	143.4×43.4	絹本着色	1幅
3	高士隠栖図・松雲僊境図	明治3	1870	35	各167.0×360.6	絹本着色	6曲1双
4	溪山真楽図	明治8	1875	40	147.9×79.0	紙本淡彩	1幅
5	我愛吾廬図	明治10	1877	42	163.8×52.2	絹本着色	1幅
6	蘭亭曲水図	明治17	1884	49	135.4×50.4	絹本着色	1幅
7	山居掃塵図			40代	146.0×34.0	絹本着色	1幅
8	武陵桃源図	明治24	1891	56	126.2×50.0	絹本着色	1幅
9	幽風詩意図	明治26	1893	58	各135.6×49.2	絹本着色	4幅対
10	勝蹟図集			50代	各 16.1×22.6	紙本着色	1帖
11	(粉本)武陵桃源図			50代	164.0×64.0	絹本着色	1幅
12	天保九如章図	明治29	1896	61	140.3×56.0	絹本着色	1幅
13	富士山図	明治31	1898	63	各153.0×352.5	紙本着色	6曲1双
14	五岳真形図	明治36	1903	68	31.1×140.8	紙本着色	1巻
15	山水図貼交屏風			60代	各131.0×51.4	絹本着色	6曲1双
16	前後赤壁遊図			60代	各129.8×52.0	絹本着色	対幅
17	蓬萊僊境図			60代	139.3×42.9	絹本着色	1幅
18	摸孫無逸山水画卷			60代	22.6×467.3	紙本淡彩	1巻
19	摸王石谷山水画帖			60代	各 32.0×24.3	紙本着色	1帖
20	俞宗礼画摸本巻			60代	49.2×511.4	紙本着色・墨画	1巻
21	鉄老談芸巻			60代	23.5×156.2	紙本墨書	1巻
22	楽此幽居図	明治39	1906	71	154.0×48.8	紙本着色	1幅
23	江山招隠図	明治42	1909	74	116.6×42.2	絹本着色	1幅
24	梅溪清隠図	明治43	1910	75	139.3×39.9	絹本着色	1幅
25	福祿寿図	明治45	1912	77	129.5×52.0	絹本着色	1幅
26	青緑山水図	明治45	1912	77	各169.0×349.8	絹本着色	6曲1双
27	古石長椿図	大正元	1912	77	150.3×41.7	絹本着色	1幅
28	武陵桃源図	大正元	1912	77	130.1×45.0	紙本着色	1幅
29	摸石濤山水画冊	大正3	1914	79	各 36.2×40.5	紙本淡彩	1帖
30	僊窟煉丹図			70代	28.0×34.2	絹本着色	1面
31	鉄叟画話			70代	各 21.4×30.5	紙本淡彩	1帖
32	十牛図意図	大正5	1916	81	150.8×51.4	絹本着色	1幅
33	群僊集会図	大正5	1916	81	188.0×71.2	絹本着色	1幅
34	王元之竹楼記図	大正6	1917	82	169.6×70.8	絹本着色	1幅
35	群僊集会図	大正6	1917	82	139.6×36.2	絹本着色	1幅
36	寄情丘壑図	大正6	1917	82	145.5×52.3	絹本着色	1幅
37	幽溪漁隠図	大正6	1917	82	142.9×51.1	絹本着色	1幅
38	東瀛三神山図	大正6	1917	82	172.0×56.4	絹本着色	1幅
39	東瀛僊苑図	大正7	1918	83	74.9×85.8	絹本着色	1幅
40	乘桴浮海図	大正8	1919	84	165.4×50.0	絹本着色	1幅
41	茂松清泉図	大正8	1919	84	153.5×51.1	絹本着色	1幅
42	東瀛神山図	大正9	1920	85	132.5×42.0	絹本着色	1幅
43	溪山招隠図	大正9	1920	85	171.0×71.1	絹本着色	1幅
44	溪居清適図	大正10	1921	86	146.0×40.0	紙本着色	1幅
45	空山静境図	大正10	1921	86	141.2×41.0	絹本着色	1幅
46	水郷消暑図	大正11	1922	87	21.0×69.5	紙本着色	1本(扇子)
47	武陵桃源図	大正12	1923	88	155.5×43.0	絹本着色	1幅
48	瀛洲僊境図	大正12	1923	88	135.3×51.5	絹本着色	1幅
49	貽笑墨戲帖	大正12	1923	88	各 38.0×27.4	紙本着色・墨書	1帖
50	梅華書屋図	大正13	1924	89	145.6×40.1	紙本着色	1幅
51	蓬萊山図	大正13	1924	89	39.8×56.4	絹本着色	1面
52	扶桑神境図	大正13	1924	89	144.5×39.3	紙本着色	1幅

[所用印]

No.53~67は鉄斎美術館寄託品

番号	名 称	刻者ほか	制作年	寸法(縦×横×高)	員 数	備 考
53	「従古」印			2.2×3.1×3.3	1顆	醬油青田石 鉄斎箱 沈南蘋旧蔵
54	「評山品水」印			1.8×1.3×3.8	1顆	豆汁青田 村山半牧旧蔵
55	「山水為侶」印			1.6×1.6×3.6	1顆	白磁
56	「釣水樵山耕雲読雪 酌酒看華吟風弄月」印			2.4×2.4×6.8	1顆	鶏血石 側款「漁莊」
57	「山水友」印	尾形乾山造	江戸	3.2×2.5×2.9	1顆	陶 鉄斎箱
58	「半潭秋水一房山」印	趙陶斎刻	江戸中期	2.0×1.0×2.7	1顆	昌化石「趙養」と両面印
59	「五日一山十日一水」印	源伯民刻	寛政2(1790)	1.2×1.2×2.4	1顆	白寿山石 「頑翁道人」と両面印
60	「五岳真形図」印	山本栞石刻	明治4(1871)	2.9×2.1×6.4	1顆	寿山石
61	「無処遊塵画山自隠」印	桑名鉄城刻	明治43(1910)	3.0×3.0×3.0	1顆	斑寿山石
62	「画禅龕」印	富岡鉄斎刻	明治後期	9.2×4.4×7.9	1顆	木
63	「玩日月龕」印	富岡鉄斎刻	明治後期	4.6×3.2×2.0	1顆	黄楊
64	「売画買山」印	富岡鉄斎刻	明治	2.6×1.4×3.3	1顆	白寿山石 「百鍊・無倦」と両面印
65	「函三居」印	富岡鉄斎刻	明治	2.6×2.6×2.4	1顆	扶桑木
66	「天真」印	小沢菰処刻	明治	1.3×1.0×2.1	1顆	白磁
67	「鍊老小隠」印	富岡鉄斎刻	大正	7.6×7.2×9.4	1顆	桑

[旧蔵本]

番号	名 称	著者ほか	発 行	寸 法	員 数	備 考
68	歴代名公画譜	顧炳編	中国・明	各 35.5×22.5	4冊のうち	原画:万暦31年(1603) 紙本墨刷
69	十竹斎書画譜	胡正言編	中国・明	各 25.0×29.0	8冊のうち	万暦47年(1619)~天啓 7年(1627) 紙本色刷
70	芥子園画伝初集	王概編	中国・清	各 25.2×16.1	5冊のうち	原画:康熙18年(1679) 三多齋刊本 紙本墨刷
71	黄山図		中国・清	25.5×16.8	1冊	康熙刊本 紙本墨刷 李復堂、富岡謙蔵旧蔵
72	龍門勝境図		中国・清	45.8×109.2	1巻	原品:同治4年(1865) 紙本墨拓
73	国朝画徴録	張庚著	寛政10(1798)	各 22.8×16.0	2冊のうち	名古屋風月堂発行 紙本墨刷
74	鑄刻台岳図(天台山図帖)	原画:江嫁圃	天保5(1834)序	各 52.0×59.2	1帖	紙本墨摺
75	天池石壁図	原画:黄公望	明治-大正	132.0×53.3	1幅	紙本淡彩

[その他]

番号	名 称	作者ほか	制作年	寸 法	員 数	備 考
76	後素必用墨	古梅園七世松井元彙製	江戸	8.7×2.1×1.2	1挺	「用南蘋沈氏秘方製」
77	熨斗	富岡鉄斎原書 六代龍文堂安之助製	明治42(1909)	長30.4 径13.2	1挺	倣王原祁法 鉄斎箱
78	金剛杵墨	富岡鉄斎原書 鈴木梅仙製	明治-大正	7.2×3.1×1.0	1挺	鉄斎箱
79	画禅庵木額	富岡鉄斎原書	明治-大正	23.9×72.5	1面	

・出品作品は期間中、下記の通り2回にわけて展示します。但し一部作品は重複することがあります。

前期:9月12日(火)~10月15日(日) 後期:10月21日(土)~11月26日(日)

・鉄斎美術館 次回展覧会

「鉄斎の器玩-煎茶皆具の世界-」

2018年1月5日(金)~2月11日(日・祝)

・鉄斎美術館・宝塚市立中央図書館聖光文庫共催企画展

「蘇東坡と鉄斎の世界」

2017年12月3日(日)~2018年2月11日(日・祝)

会場:宝塚市立中央図書館聖光文庫《入場無料》

清荒神清澄寺 鉄斎美術館

〒665-0837 兵庫県宝塚市米谷清シ一番地 Tel.0797-84-9600 Fax.0797-84-6699 <http://www.kiyoshikojin.or.jp>

平成29年9月1日 印施